ハリー・ポッターと非力な兄君の人生

松竹梅秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハリー・ポッターと非力な兄君の人生

【Ｎコード】
Ｎ０６３８Ｖ

【作者名】
松竹梅秋

【あらすじ】
死んだと思ったさ、でも生きてた。そしてハリー・ポッターの兄だった。でも、すぐに社会的にハリーの兄は葬り去られた。俺は俺として生きてほしいとダンブルドアが言った。俺の望みは何？

俺と新たな人生の始まり（前書き）

7．21　誤文訂正
7．24　加筆修正

俺と新たな人生の始まり

死んだ！

そうだ、俺は死んだのだ！
あまりにもあっけない死だったように思えるが、そんな事はどうでも良い。

何故、俺は生きているんだ？
何故、俺は赤ん坊なんだ？

俺は叫んだ。

なにやら騒がしい。
目覚めてみるとやはり俺は赤ん坊で、その汚れを知らぬ小さな手をそっと見つめた。
現実は変わらない。

「あら、起きたの？」

あうぅ、という締まりのない返事をしてみる。
すると、花がほころんだような笑みを返してきた赤毛の女性はおそらく俺の母親だ。

「え、起きたって？おい！僕の子が起きたぞ！」

黒髪の眼鏡をかけた青年が誰かに知らせた。
身体が赤子だからであろうか、単純な思考しか出来ない・・・
「お前の子供だとは思えないぐらいかわいいなこの子。」
後から来た男性??こちらも黒髪、ただし眼鏡をかけていない??が覗き込んでくる。顔が近い！そんなに強く頬をつっつくな！！
「抱いてみても良いかい？」
鳶色の髪の男性がやってきた。
「いいよ、リーマス。でもその前に、君が彼の名付け親だ。綺麗な赤い髪の毛をしている・・・先に僕の子に名前を付けて欲しい。」
はじけた感じとはうって変わって、父がリーマスに語りかけた。
「ああ、この子の名前はロイドだ。ロイド・ポッターに祝福あれ。」
やさしく抱き上げられる。
ああ、俺は死んでまた生まれたんだなって思った。
「俺も名前つけたかった。」
「シリウスは黒髪の男の子、赤い髪の男の子だったらリーマスで黒い髪の女の子なら私の友達が名前つけるって約束でしょ？ロイドってすてきな名前じゃない。」
「赤い髪の毛の女の子だったら僕がつけるはずだったのになぁ。」

いつの間に来たのか小柄な男が俺の頬をつっついている。止めてくれ。

「まぁ、二人目の子供が生まれるまで持ち越しさ！」

父がそう締めくくった。

俺の名前を付けた人はリーマス
黒髪のハンサムさんはシリウス
小柄な男はピーターで、
父の名前はジェームズ、母の名前はリリー

これはもうチェックメイトだろう。
間違いなくハリー・ポッターの世界だ。

ロイド・ポッターなんて出て来ないはずだ。
ああ、ヴォルデモートに襲撃されるときに殺されるのかな？

幼すぎる身体は自由に動かす事が出来ない。
起きている短い時間は赤子らしくしていたり（身体に精神が引っ張られているのか理性ではなんて事無いと思っている事もなんだか無性に面白く感じられた）、考え事したりしていた。また死ぬのかな俺。
俺の起きている時間は天井をカラフルに染め挙げたり、クマの人形に抱きつくとクマも抱き返してくるとかいう、かわいいいたずらを仕掛けている父を何となく尊敬してみる。

シリウス曰く、俺が生まれてから悪戯が乙女チックになったらしい。
生まれて初めての誕生日には皆がやってきて、いろんなプレゼントをくれたし、ハロウィンのときは俺が仮装させられて、写真撮影会みたいになった。
母の作るケーキは最高だ。
バースデーケーキのホイップはお菓子屋さんと変わらないぐらいにきめ細やかだし、パンプキンケーキの甘い匂いは心を弾ませる。
ピーターは市販のお菓子をたくさんもってきてくれるし、リーマスはそのお菓子をつまみつつ家を華やかに飾り付けしてゆく。
父とシリウスは飾り付けに魔法を掛けておもしろおかしくして遊んでる。

母と父が買い物に行って、シリウスが面倒を見てくれた事もある。
普通の子供だったら両親と離れると泣き出すのかもしれないけれど、

「ロイド、お前は滅多に泣かないなぁ。まだほんの一歳なんだから、もっと自由にしてて良いんだぞ。」

と話しかけてきたときはどきっとした。ほとんど彼の独り言だったけれども。
優しげに細められた目、その間に覗く灰色の虹彩がキラキラと光っている。
何となく、シリウスの頭をなでておいた。ありがとう。
あとは犬に変身したシリウスと一緒におひるねした。

「ロイド、僕が君のパパだよ！」

今更言わんでもわかります！

最近よく話しかけてくるなぁ、と思ってたらそろそろ子供が話し始める歳なのか？

「あぽー！」

「え、初めての言葉がパパでもなくママでもなくリンゴなのかい？パパって言えたらリンゴジュースあげるよ！」

「ぱぱー」

涙目になった父がかわいそうになってきたので素直に申しましょう。決してリンゴジュースが飲みたいからではない、はず。

「リリー！ロイドがパパっていったよ！」

「ロイド、ママよ！」

「ままぁー！」

本当に賢い子ね、と頭をなでられた。

暖かくてほっとした。

シリウスが躍起になって名前を言わせようとしてくるのがうざかったり、リーマスがえらいえらいってほめてくれたり、ピーターがその様子を遠巻きに見ている。

シリウスって言いづらいんだよ？

まぁ、そんなこんなしているうちに弟が生まれた。

「名前はハリーだ！ハリー・ポッターに幸あれ！」

黒い髪に緑の目。まだ稲妻の走っていないつるつるとした額に手をのせてハリーをなでた。

フニフニとして気持ちがいいほっぺを優しくつつく。

「今日からロイドはお兄ちゃんだぞ！」

そんな日々がきっと幸せだったんだ。

聞こえる、父の、ジェームズの焦った声が。

ヴォルデモートが弟を狙っている。だから、

「ロイド、ロイドはしばらくリーマスと暮らしてね。ロイドは良い子だからきっと大丈夫さ。きっとまた、一緒に暮らせるはずだから。」

優しげな父の声は今でも忘れられない。

あれから八年。

ハリーが「生き残った男の子」として一世を風靡して五年。

ロイド・ポッターがロイド・ルーピンになって八年。

『きっと』はやって来なかった。

俺と乱れる父の内心（前書き）

7．24　修正

俺と乱れる父の内心

おはよう、ロイド・ルーピン。

鏡を覗き込めば夕焼けのような鮮やかな赤毛に、アーモンド型の目の奥にはエメラルドを光に透かしたような見事な瞳が輝いている。俺は恐ろしく母親似だった。父の面影はそこに無い。

ハリーが狙われていると両親が知り、俺をリーマスのところに預けると決めた翌朝（俺は子供だからわからないだろうと思われたのか、話し合いの席で普通に座らされていた）、母がハリーをつれて買い物に行っている間、父と二人きりになった。

「ロイド、僕はね、友人を疑うような事はしたくないんだ。でもね、僕は・・・・・・」

口調は普段の父からは想像できないぐらいに静かで、憂いに満ちていた。

「ダンブルドアに忠誠の術を勧められたよ。人の中に秘密を封印して、その人がバラさない限り秘密がばれないようにする術さ。

僕はシリウスを裏切らないし、シリウスも僕を裏切らないと思ってたさ。

でも、シリウスはなんで秘密の守人をピーターに変えるように勧めてきたんだろうか？

たしかに僕とシリウスの付き合いを見てた人からすれば、秘密の

守人はシリウスにするに違いないって思うはずさ。だからこそ、ピーターを隠れ蓑にする意味があるのはよく分かってる・・・・・・
いや、そこが問題じゃないんだ。問題はシリウスがリーマスを疑っているってことなのさ。
なんでだろうね、僕たち四人はずっと一緒にやってきたのに、なんでお互いを疑わないといけないんだろうね。リーマスが裏切る訳が無いじゃないか。
だって、彼は確かにしたたか者だけど、僕やシリウスよりも善悪の判断がしっかりしている。
それに、なんといったって、ロイドの名付け親じゃないか！どうして疑う必要があるんだろう・・・・・・
僕は逆にシリウスが信じられなくなってきたよ・・・・・・」

そんな泣きそうな顔をしないで、そう言えたらどんなに良い事だろう。
まだ舌足らずなしゃべり方しかできないこの口では俺の言いたい事は伝えられそうにも無かった。

「ぱぱ、ぴーたー、だめ。」

「ロイドまでそんな事言うのかい？いや、シリウスの提案を受け入れるさ。こんな時代だからこそ皆で乗り切るんだ。それでダメだったら、どんなことしたって無駄なんじゃないかな。僕はそう思うんだよ。」

ダメだ、ピーターが裏切り者なんだ、

「ぱぱ、」

「ロイド、パパを信じて？」

ぎゅっと抱きしめられた。俺はそれ以上口を開く事は出来なかった。父は何も語らずとも、俺の言いたい事はわかっているという風だった。

「杖を買いに行こうか。まだ早すぎるかもしれないけど、ずっと子供の杖選びをしたり、一緒に箒に乗ったりしたかったんだ。」

どうしてこのタイミングでそんな事言うんだろう。
まるで、そんな時が来ないみたいな言い方じゃないか。

幾本目かで美しい花が杖先から咲き誇って、店内を舞った。あたたかな空気が充満する。これだ・・・・・・

「カエデにセストラルの尾。２９センチ。最高傑作、良質で柔軟性に富む。あらゆる呪文に対して最適。」

「すごいじゃないかロイド！杖を選ぶにはちいさすぎるからダメだと思ってたよ！」

「いやいや、ポッターさん。この子は間違いなく偉大な魔法使いになりますぞ。この杖は・・・・・・」

オリバンダーさんと父の喜ぶ声が聞こえた。
屈託の無い笑みを浮かべる父を見たのはこれで最後だったかもしれない。

「ダンブルドア！私にロイドを育てるなんて無理です！私が何者であるかご存知でしょう！？」

リーマスは訴えた。
俺が三歳になったばかり、父と母がヴォルデモートに殺されてしまってすぐの頃だ。
俺はリーマスの家のソファーで微睡んでいた。

「しかし、君はこの数ヶ月立派にこの子の世話をしてきたじゃろう。リーマス、君が何者であるかはよく知っとる。子供好きで愉快な魔法使いじゃ。それに、君はこの子の名付け親じゃろう？」

「それ以前に私は人狼です！もし一緒に暮らしていて、この子を噛んでしまったら、それこそジェームズとリリーに申し訳が立たない！この数ヶ月だって、満月の日はジェームズ達のところに戻るという約束で引き受けていたんです！」

「リーマス、落ち着くのじゃ。君以外に誰がロイドを育てられるというのじゃ？それに、ポッター家の者がハリー以外に生き残っておったとすると間違いなく騒がれるじゃろう。それはこの子の為にはならぬ。この子がポッターを名乗れば、ハリーの兄として世間から見られる事になる・・・・・・ロイドは、ロイドとして生きてほしいのじゃ。ジェームズの為にも、リリーの為にも。守ってやれるのはリーマス、君しかおらん。」

ダンブルドアが俺の髪を撫でた。
俺は目を開き、半月型のレンズ越しに瞳を覗く。

「まことに、リリーにそっくりじゃ。毎月、満月の頃に脱狼薬を届けさせよう。この子は賢い子じゃ。きっと、それで大丈夫じゃろう。」

月日が流れて、ただ今１１歳。

「ようやく終わった。やっとできた・・・」

何枚も重なっているルーズリーフの最後の一ページを書き終え、ペンを置いた。

五歳の頃から魔法使いの図書館に入り浸り、司書長の協力を得て魔法薬学やら何やらを学び、ようやく完成した本当の脱狼薬の研究。

従来までは理性が保たれるだけだったが、俺の発見した薬なら一度服用すれば二度と人狼になる事は無い。完璧だ。

俺と優しい義理父の暮らし（前書き）

7．24　加筆修正

俺と優しい義理父の暮らし

リーマス、いや、父さんは定職に就くのが難しい。
なぜなら、狼人間だからだ。

「父さん！薬が届いたよ！」

毎月、満月の頃になると送られてくる薬の正体は教えられていないけれど脱狼薬だってことぐらい知っている。
添えられているカードには達筆な字で「砂糖を入れないように」と書かれている。
毎月同じメッセージを送ってくる生真面目さがありがたい。

「机の上に置いといてくれ、すぐに昼食ができるよ。」

青白い顔でフライパンをひっくり返している父さんがぼそぼそと言った。
本当に具合が悪そうだ。

「父さんは座って、後は俺がやるよ。」

「いや、ロイド。このくらい平気だよ・・・・・・代わりと言ってはなんだけど、洗濯物を取込んで来てくれないかな？」

「わかった！」

そう言って、階段を駆け上がって、ベランダではなく薬を運んできたフクロウの所に向かった。
俺の脱狼薬の研究を見てくれるのは、毎回脱狼薬を煎じてくれる人しかいない。俺の推測が正しければ、スネイプ教授だ。
ルーズリーフをバインダーに綴じ、封筒に突っ込んで防水呪文を掛けた。
ちゃんと運んでくれよ。

五歳になったばかり、父さんが日雇いの仕事をたまに見つけてきては唐突に出かける程度にしか仕事が無く、で食べる物も危うかった頃のことだ。

「そろそろ仕事に行ってくるよ。」

「とうさん、ぼくマグルの『ないしょく』ってやつやるよ？」

俺は危機を覚えていた。父さんがこの二、三日何も食べていない事を知っている。
このままじゃ俺たち、餓死してしまう！
マグルの内職なら、杖をひとふりすれば大体片が付くし・・・・・・

「ロイド！それだ！」

いきなりどうした。父さんは目を輝かせて俺を揺さぶった。

「魔法界で就職が無いなら、マグル界で働けば良いんだ！そうしたら私の病気について話さなくてすむ．．．．．！」

あぁ、なんで今まで気付かなかったんだろう！
子供のように（いや、俺は実際子供なんだけどね。）よろこんで、父さんなんかは俺をもちあげて『たかいたかい』に回転をつけた洋な格好で振り回した。

「今日の帰り、マグル界で就活してくるよ！錯乱呪文使ったら一発じゃないか！だからロイドはまだ子供なんだからお留守番しててていいんだよ！」

でもさ、家に居るだけだと退屈なんだよね。
というか、錯乱呪文って、キャラ違ってない？
杖はまだ父さんが預かったままだし、結構身体に引っ張られてるから言動が子供っぽいけどねぇ。

「とうさん！図書館いきたい！」

「え、でも父さんは今から仕事だよ．．．．．？」

「ひとりでだいじょうぶ！」

「でもねぇ、」

流石に渋る父さんは何やらぶつぶつ言っている。
そもそもこの子に文字教えたっけ？とか誘拐されたらどうしよう、でもあいつがいなくなってからは治安も良くなったしなぁ、賢いから本だってたくさん読みたい気持ちはわかる、だがしかし、いや、

その前にこんなかわいい子が誘拐されない訳が無い、悪戯道具大量に仕込んどくかだとか。
あれ、途中から違う方向に進んでますよ、リーマスさん。

「お仕事がおわったらむかえにきてね！」

司書さんに俺の事をお願いするという結論で話がついた。
なんだかんだ言って、父さんは俺に甘い。

ホグズミードの少し外れにある『ホグズミード魔法図書館』は魔法界で最大の規模を誇る。
なんでも、魔法界で発行された本ならば必ずあるとか、ないとか。
ある、らしいけど広すぎて見つけるが容易でない。
魔法界の図書館は、イギリス国内でいえばホグワーツ内のものと、魔法省に併設している役人の為のものとホグズミードしか無い。
ホグワーツや魔法省の図書館は利用できる機会がすくないため、一般の魔法使いが利用するといえばここだ。
初めて訪れる魔法使いなら、この図書館の広さと荘厳さに圧倒されるであろう。
巨人が手を伸ばしても届きそうにないぐらいの高さをもつ本棚に、どこまであるかわからない奥行き。
上の方の本を見るには気が遠くなりそうなほど長いはしごを上らなければならない。
棚は生前と並んでいるのに、迷子になりそうだ。

「ロイド君、今日も勉強？えらいねえ。」

入り口の方は子供向けの低い本棚に小さい椅子が用意されていて、童話などが十分にそろっていた。
しかし、それらに目もくれず奥の方の魔法薬のコーナーで必死に羽ペンを動かす珍妙な五歳児の俺に、司書さんが周りに迷惑をかけない程度のぼそぼそ声で話しかけてきた。

「はい、薬学をべんきょうしておけばホグワーツでこわいモノ無しだってきいたので。」

そんな事は誰からも聞いていないけれど、脱狼薬の研究だということを言う訳にはいかなかったので咄嗟に嘘をついた。

「薬学なら事務室にいる司書長が詳しいし、それに彼の友人に、以前ホグワーツで薬学の研究をしていた人がいた気がする。なんでも、ホグワーツの頃の同窓でお互いに薬学の点数を競い合ってたんだとか。司書長は子供好きだからきっと力になってくれる。」

「そうなんですか？」

「ああ、あんな強面だけどね。話しかけにくいなら紹介してあげようか。」

こう言うのを渡りに船っていうのかな。

「あ、はい。お願いします。」

「ロイド・ルーピン君だっけ？かわいいねぇ。君のお父さんが目を

離さないように頼んでいた訳がわかるよ。」

俺は首を傾げておいた。

「ああ、君を僕に紹介したうちの司書にだよ。彼は人柄が良いから初対面の人からでもいろんなお願いごとをされる。最も、彼と君のお父さんは以前から知り合いだったようだけど。」

強面ででっかいマックス??司書長の名前??だが、話口調は司書より穏やかで気さくだった。

「うちの父さん、そんなことしてたんですね。」

「まぁ、例のあの人がいなくなってから随分と治安が良くなったが、犯罪が絶えることは無いからね。心配し過ぎで丁度いいぐらいだよ。

で、薬学を学びたいんだっけ？

僕は教えるのも好きで、司書とホグワーツの教授のどちらにしようか迷ったんだけどね。新しい事を研究するのも好きだから、司書をやりつつ今でも個人的に研究していたりするよ．．．．．．

この図書館はあらゆる論文や書物が集まるから、僕みたいに個人で研究がしたくて司書になる人も結構いるんだ。司書ならば、どの論文がいつ入ったかすぐにわかるからね。

それに、教授の座を狙うとするとまたあいつと争わないといけなさそうだったし．．．．．．ところで、どこまで勉強したの？」

「えっと、今二年生の終わり頃です。」

まずは学校のカリキュラムを用いて勉強していくのが効率的だと思ったので、教科書を読む事から始めた。

不可解なところや興味の引いた部分があると、その度に立ち止まっ

て他の本を参照にしつつ勉強していたので、独学の割に進度が遅いとおもっていたんだけど、

「この図書館に来て二ヶ月だっけ？早いね。もしかして家でも勉強してる？」

「はい。」

「そっか、なるほどね・・・・・・」

マックスはにんまりと口角を上げ、悪戯っぽく瞳を輝かせると、

「君は中々骨があるようだ。頭も悪そうでは無い。私の指導はちょっと厳しいかもしれないけど、やってみるかね？」

「わざわざ時間を割いていただけるのですか？」

「言っただろう？教えるのも好きだって。君が生徒になってくれれば、僕は司書だけでなく教師にもなれた事になる。こんな充実した人生は滅多に無いよ。」

「是非、よろしくお願いします！」

思いがけぬタイミングで先生が見つかった事に興奮し、俺はマックスと握手すると、その手をぶんぶんと振り回してしまった。

マックスのしごきは本当に厳しかった。特に進度とレポート形式の宿題の面で。
一日一枚レポートを提出しなければならないし、その量も多い。
仕事の合間にちょくちょくやってきては（魔法薬の棚を担当しているのか、俺に話しかける機会を作るのはそう難しい事ではなかった）俺をテストしたし、気をつけておくべき事を簡潔に説明してくれるけれども、
いろんなところに立ち止まっては、いろんな本を読むという学習スタイルを取ってきた俺には早すぎると感じる程だった。
それに、マックスは薬学だけでなく主要な変身術や妖精の呪文、闇の魔術に対する防衛術など様々な課題を俺に課す。
薬学とは切り離せない縁をもつ薬草学は特にみっちり叩き込まれた。
薬学だけでなく、さまざまな分野の知識を身につけた方がより理解が深まるそうだ。
ペンを握りっぱなしの手に羽ペンはつらい。なにより、羽の部分が顔に当たるのが嫌なのだ。
ホグワーツに入学してから苦労するよ、と反対されつつもボールペンに持ち替えた。
それで負担は少し減ったけれど、昼夜を問わずに勉強してもついて行くのが大変だ。
平行して狼人間に関する研究の資料を読んだり、脱狼薬の原理を理解しようとしていたので疲労は溜まる一方だった。

「ロイド、君の学習能力の高さは認めるけど、ちょっとがんばり過ぎじゃないかな？」

マックスが苦笑まじりに言った。
勉強していて思ったが、俺は意外と完璧主義者だったらしい。そう指摘された。

「よくもまぁ、百年前に書かれたような『生ける屍の水薬の多種多様な用い方』なんて本見つけてきたね。それとレポートこの部分。僕は基本こそ教えたけれど、こんな応用まで教えたかな・・・・・？というか君は新しいものを考えるのが好きなのかい？リーマスに聞いたけど夜もずっと勉強してるって言うじゃないか！熱中すると周りが見えなくなるのは、良く言えば集中力があるってことだけど・・・・・少しは休みなさい。もう少しでＮＥＷＴレベルに到達することだし・・・・・・」

いつの間にかマックスと父さんは友人になっていたらしい。
後から、どちらかというと保育園の先生と保護者の関係だとマックスに聞かされた。

ホグワーツを卒業するには十分足り得るであろう知識をつけた後はもっぱら最新の研究について論議しあったり、それとなく脱狼薬に役に立ちそうな知識を聞き出そうと躍起になった。
最近研究がちっとも進まない。既存の脱狼薬の調合も複雑なのに、どうやったら完璧な脱狼薬になるんだ？
朝顔を洗っていても、晩ご飯を食べていてもその疑問だけが頭の中でぐるぐると回っていた。
父さんが人狼だとばれる可能性があるから脱狼薬に関する研究は持ちかける事が出来なかったけれど、マックスと既存の脱狼薬に関しての討論することでどうにか解決の糸口を見いだせない物かと試みてみたけれど、現状を打破するには至らなかった。

「ロイド、そろそろ寝なさい。」

父さんがいつもより厳しく言った。

「わかった。おやすみ父さん。」

こう言うときの父さんに反抗すると厳しく怒られるだけなので、素直に従う事にした。
明日の朝早く起きてやればいい・・・・・・

「ロイド、一生懸命に勉強するのはいいことだけど、身体を壊したら意味が無いんだよ。時々夜中に起きてこっそり勉強している事を父さんはちゃんと知っているんだからね。それに最近は、拍車をかけて読書や勉強ばかりしているじゃないか・・・・・・なんでそんなに必死に勉強するんだい？」

父さんは心配そうに言った。

「楽しいからだよ。知識を得るのが好きなんだ。」

そう、笑って誤魔化す。
この時俺は八歳だった。この歳から、父さんからの誕生日プレゼントに本が追加された。
脱狼薬の研究が途中で行き詰まっている。その事に神経が立っているの、例えば時計の秒針の音などで、些細な事で目を覚ましてしまう夜が続いていた。
何かが足りない。
人狼は人間に噛み付く事によってその仲間を増やす。
噛み付く事によって、魔法使いを人狼に変化させるウィルスをうつすのだ。
ウィルスは寄生した魔法使いから魔力を少量ながら奪う事ができる。
満月の夜、昔から世界の魔力が増えるとされるこの夜にだけ変身するのは、寄生した魔法使いの魔力と満月の魔力を反応させているか

らだとされる。
既存の脱狼薬はこのウィルスが宿主の魔力を奪う事を阻害するためのもので、ウィルス人狼の理性を保つ事だけは成功させている。
ウィルスが宿主から奪った魔力をなくさなければならないので、満月の前の一週間は薬を飲み続けなければならない。
しかし、その処置は一時的な物にすぎず、ウィルスは実は魔力無しでも生きることができるので、寄生体から魔力を奪い取る事で再び魔力を持つようになる。
ウィルス自体は魔力を持たないのだから、マグルがこのウィルスを持っていても人狼になる事は無い。
魔法族にしか人狼がいないのはこの為だ。
こいつは中々のくせ者で、ウィルスが魔力を持っている状態だと殺す事はできない。この辺の詳しい事はわかっていないが、ウィルスが魔力を吸収するのは寄生体の中で確実に生きて行く為だろう、と言われている。
脱狼薬を飲んでいる期間に殺せば良いじゃないかと思うかもしれないが、ウィルスを殺す主成分となりそうな薬草と脱狼薬の相性が悪く、服用者が死に至る危険性がある。
どうすれば良いんだ。

「ロイド、新しい研究の資料が入ったから置いておくよ。」

そんな生活を繰り返す間に二年過ぎていた。
マックスの空き時間は俺との討論に費やされる。
仕事も忙しいだろうに、たくさんの知識を授けてくれた。
首にならないだろうか？とこちらが不安になった程だ。

「いつもありがとうございます。」

「それにしたって、どうしてそんなに薬学ばかり必死こいて勉強するんだい？まぁいい。話したくなければ話さなくたっていいんだ。君程の理想的な生徒を教えられて私は良かったと思っているよ。僕にとっても良い息抜きだ・・・・・・もっとも、実習は出来なかったけれど。」

「いえ、本当に対した事じゃないんです。俺も司書長さんに教えていただいて良かったと思っていますから。」

そう言うと、マックスはにっこりと笑った。

「そうそう、この新しい研究なんだけどねもしかしたら君の薬に立つかもしれないよ。君はトリカブトの事についてやたら調べていたからね。これはトリカブトと他の薬草の反応のまとめなんだ。読んでおくと良いよ、なにせ最新だ。」

この為だけに来たらしい。
パラパラと読み始めると、脱狼薬うんぬんを抜きにして実に興味深かった。
このごろでは薬学を学ぶことが唯一の安心できる時間となっていた。
逆に勉強していないと、焦りだとか、痒いところに手が届かない気持ちでいっぱいになるのだ・・・・・・

ページをめくる手が五十九ページで止まった。
これだ。
トリカブトを中和する薬草とその副作用。

俺は鞄をもって、貸し出し手続きを済ませると薬草学のコーナーに走って行った。
静かな館内に靴音が響くことを全く気にしなかった。

「あった、これだ。」

『リコリスとその毒の効力』という本を取り出す。

「リコリスは毒抜きする事によって、食す事が出来る。しかし、毒にこそすばらしい効能があるのだ・・・・・・』

しばらく著者がリコリスをほめたたえる文章が続く。

『リコリスの毒にユニコーン角の粉末を加え、十分間半時計周りにかき混ぜつづけた液体は大抵の毒薬を打ち消す。しかし、この液体も毒性ときわめて強い殺菌能力を示す。強い殺菌能力はリコリスの毒がユニコーンの角に働きかけて現れる物である。』

一年前に読んだ本だった・・・・・・

そして、最新の研究の五十九ページには

『トリカブトとリコリスは互いにその毒を打ち消し合う。』

これだ。脱狼薬の服用者にリコリスの毒とユニコーンの粉末を混ぜた液体を飲ませればあるいは・・・・・・
後は比率や、服用者が死に至らない量などを計算すれば人狼の原因となるウィルスを殺す事が出来るかもしれない・・・・・・

洗濯物をとりこんで下に降りると、すでに昼食は完成していた。

「良いところに来たね、よし、食べ始めようか。それと、今晩は出かけるから父さんがいない間は決して外に出ては行けないよ？」

満月前後は仕事を休まなければ行けないので、やはりマグル界でも定職につくことはしなかった。

でも、アルバイトはできるので実質フリーターのようなものだ。

父さんは夜のいない時間を夜勤だと思わせたいらしく、満月の晩以外でも時々出かけている。

アルバイトでも割のいい仕事を選んでいるようで、最近では食べ物に困る事も無くなったしつぎはぎだらけのローブをではなくきちんとした物を着ている。

マグルのおかげで原作よりよっぽど裕福に暮らしている。

今宵は満月だ。

太陽ががオレンジ色になった頃に父さんが出て行った。

ひまだなぁ、なにしようか。

図書館で借りてきた本でも読んでいよう。

薬学の勉強は終わった、次は闇の魔術に対する防衛術でも極めようかと借りてきた本を広げ、居間のソファーにどっかりと腰掛ける。来るべきヴォルデモートの復活や、戦いのために一つでも多くの知識を蓄えておいて損は無いだろう・・・・・・

読み進めるうちに、闇の魔術に対抗する為には闇の魔術そのものをしっかりと理解しておく必要があるのではないかと疑い始めたら、ホラー映画さながら、家の扉を叩く音がした。

「ルーピン！今すぐ開けろ！」

扉を開けるとでっかいコウモリがそこにいた。

俺と優しい義理父の暮らし（後書き）

原作に突入したら主要なシーンを省く部分が出てきますので、
「ここはよみたい！」というシーンがありましたら、
リクエストお願いします。

俺と完成した脱狼薬の研究（前書き）

7．24　加筆修正

俺と完成した脱狼薬の研究

セブルス・スネイプの瞳が見開かれた。
昼にルーピンのもとに脱狼薬を運んだはずのフクロウがスイーッと部屋に入ってきたかと思うと、何やら分厚い封筒を机の上に叩き付けた。
なんだこれは、と封筒を開けば出てきたのはマグルの使うようなプラスチック製の物(バインダー)で、その間に一センチ程の分厚さの紙が挟まっている。
そして、タイトルは『脱狼薬の研究の完成』と書かれていた。

なに、この人怖い。
真っ黒な服に真っ黒なローブ。
真っ暗な瞳に、重油にひたしたような黒い髪が油っこく覆いかぶさっていた。

「あの、どちら様でしょうか。父は外出中ですが・・・・・・」
ロイドはこの男が早く立ち去らないものかとソワソワした。
男はロイドを見ると一瞬固まったように見えたがすぐに話し始めた。
「我輩はホグワーツで教員をしているセブルス・スネイプだ。聞くが、これに見覚えはあるか?」
ロイドが昼間に送ったバインダーが差し出された。

「いいえ、ありません。」

最初からロイドは脱狼薬の研究について知らぬフリをすると決めていた。

この研究を元に誰か権威のある人（そういった点でホグワーツの教授であるスネイプは実に適任だった）がどこか自分の知らないところで発表してくれればいいと心底思っていた。

スネイプはロイドの返答に眉間にしわを寄せたがすぐに表情を元の仏頂面にもどすと、

「本人はこう言っておりますがな、校長。」

「まぁ、折角じゃ。上がらせてもらうとしよう。良いかな、ロイド？」

後ろからひょっこりと、ダンブルドアが顔を見せた。

「お茶です。すみません、お茶請けが無くて。」

ロイドはソファーに腰を下ろしていた二人に最低限のもてなしをしようと、まずお茶を入れる事にした。

「いいのじゃよ、突然押し掛けてきたのはわしらなのじゃから。ところで、お茶を入れるところを見させてもらったのじゃが、君はもう無言呪文が使えるのかね？」

ダンブルドアは穏やか言った。

「あ、はい。長い呪文が上手く言えないときに杖を持ったので・・・・・・ 呪文を唱えずに杖を振り回していたら使えるようになっていました。」

自分の手の中にある杖を弄びつつ、二人の前のソファーに腰を下ろした。

幼少期から呪文の練習をしていたが、呂律の回らない舌で複雑な呪文の発音の練習をするより無言呪文の練習をした方がよっぽど効率的で、そしてその考えは間違っていなかったとロイドは思っていた。

「校長、やはりこやつが書いたにちがいないでしょう。そちらのソファーの横に置いてある本、『閉心術とその心得』はＮＥＷＴレベルを軽く越えておりますぞ。」

スネイプは訝しげに言った。

「読むだけで、理解はできませんよ?」

一応反論するロイドに、

「うむ、わしもそう思っていたところじゃ。普通の十一歳の子供がその本を読むには、少々度がすぎておる。それに『最も強力な魔法薬』は、たしかホグワーツでは禁書になっておったはずじゃ。」

ダンブルドアがロイドの目を見透かす。

「もう一度聞くがね、『脱狼薬の研究の完成』を書いたのは君じゃ

ろう？」

ロイドは自分の負けを悟った。

「君は非常に賢いようじゃな。君の持っている本の書名だけで判断した訳ではないぞ。おそらく君は自分の名前が世に出ることを恐れたのじゃろう。とても懸命な判断じゃ。君の歳で、これほどの物を書いたとすると、名声だけでなく周囲の妬みや反発を招くのは避けられぬことじゃ・・・・・・」

自分の考えていた事を当てられてドキッとした。

「はい、たしかにそれを書いたのは俺です。懸念していたのはそれだけじゃなくて、俺の名前が出る事によって父さんが人狼であったということが広まる方が恐ろしいのです。何せ、俺にも言わずに隠し続けてきたことですから・・・・・・」

なにせ、勉強を教えてくれていたマックスにも言わなかったぐらいだ。

ふむ、とダンブルドアがうなった。

「やはり、よく考えていたようじゃの。」

「これほどの論文をいつから書き始めたのですかな？」

「五歳、いえ、書き始めたのは六歳からです。薬学を学び始めたのが五歳でしたので。」

「では、五歳のときにはすでにルーピンが人狼であると気付いていたのかね？」

スネイプの声色は先ほどまでの冷静さを欠いていた。

「ええ、たまたま。それと、俺も一応ルーピンなんですけど・・・・・・」

ロイドがそう言うと、スネイプは一瞬怯んだが、「よかろう。」と返答した。

「しかし、よく完成させたのう。ダモクレスも君より以前から治療薬を完成させようとしておったのじゃが・・・・・・ダモクレスは最新の研究に目を通しておらんかったようじゃの。君が気付かんかったら完成にあと数年はかかっていたじゃろう。この研究のおかげで救われるのは君の父君だけではないぞ。」

「しかし、それはまだ実証されていません。完成させたというよりは、発見したと言った方が適切だと思います。もしトリカブトを研究していた人が脱狼薬や人狼に非常に詳しければ、間違いなく気付いた事でしょうし・・・・・・俺はリコリスとトリカブトが丁度良く中和するの量を計算するぐらいしかやってません。そもそも、その研究に間違いは無いでしょうか？研究費などが無かったので実験などができなくて、あくまでそれはただの理論にすぎないのです・・・・・・あと、俺以外誰もチェックしていないので、その点が心配だったのです。」

スネイプが??スネイプだけでなく一般の人々にも当てはまるだろうが、??傲慢でいばりくさった人間を酷く嫌っている事をロイドは知っていたので、あくまで下手に出た。

脱狼薬の存在を知る者はまだ少ない。

ここ十年で開発された薬の為、ホグワーツの授業でも名前に触れる

程度でその複雑な調合や理論について学ぶ事は無かったし既卒生では全く知らない者の方が大半なのではないだろうか。
そもそも、人狼の習性や襲われたときの対処法、見分け方を教えこそするが、人狼に至る細かなプロセスなどもホグワーツでは教えられないのだ。
知っている物は研究しているごく一部の者達だろう。

「あのリコリスとユニコーンの角を煎じた液体とトリカブトの毒性の打ち消しについて聞きたい。」

「ええと、リコリスの毒がユニコーンの角に働きかけて強い殺菌成分をしめします。」

スネイプが小さく頷いた。

「トリカブトとリコリスの毒は中和されて、服用者が死に至る事はありませんが、あらかじめ強い殺菌作用を持ったユニコーンの角の粉末が中和される事は無いので、殺菌作用は持続する、と言った風です。この殺菌作用は運良く、人狼ウィルスに対して効果をもつ種類の物でした。」

「ふむ、何の問題ありませんな。論文自体にも問題は無かった。間違いなく、このルーピンが書いたものでしょう。」

スネイプはつぶやいた。

「さて、わしらは明日の昼間にまた来るとしよう。君のすばらしい研究の成果をリーマスに報告しなくてはなるまいて。」

ダンブルドアが立ち上がると、スネイプもそれにならったが、

「出来れば父には俺が開発したとは言わずに、ただ、治療法がみつかったとだけ言ってもらえませんか？俺に知られずに人狼ではなくなった、という方が父が報われると思うんです。」

なにより図書館に通い始めたのが、第一にこの研究のためだと父に知られるのが少々気恥ずかしかった。

「ふむ、君がそうしたいというならば、そうした方が良いのかもしれんの。」

ダンブルドアが微笑んだ。

玄関の扉を開けると、家の周囲を取り囲む森は非常に静かで、煌々と光る満月が静寂に神秘性を与えている。

「では、明日また会おう。おやすみ、ロイド。」

姿くらましのバシッという音が森に谺した。

12．13　矛盾点修正

俺と歓喜する義父の秘密

「本当ですか！？」

父さんの叫ぶ声で目を覚ました。
脱狼薬の研究を終えた最初の夜だったので、久々に深く眠りにつけたなと溜息を吐く。
時計を見れば、既に正午を過ぎていた。
あの二人が来るというのに寝過ごしてしまったこと気付いて、あわてて支度し始めた。
今日に限って寝癖が酷く、治すのに苦労する。髪の毛が長くなってきたのでそろそろ切りたい。
ぼさぼさのロングは見苦しいな。
脱狼薬のことばかり考えてたから、身だしなみの事を全く気にしてなかったからなぁ。
父さんも何も言わないし。
やっとの事で居間に降りて行けば、ダンブルドアとスネイプが昨日と同じソファーに座って、父さんと話していた。

「こんにちは」

「おお、ロイド、遅かったのぉ。昨日は遅くにすまんかった。よく眠れたかね？」

「はい、ダンブルドア先生」

「ロイドがこんなに遅いなんて珍しいね。ダンブルドア先生は昨日もいらっしゃったのですか？」

「ふむ。セブルスも一緒にお邪魔したんじゃが、君がおらんという事をすっかり忘れておった。ロイドが美味しい紅茶を入れてくれたよ。階段の前で突っ立ってないで、座ったらどうかね？」

「あ、はい。そうします」

父さんの横に座って、顔を上げるれば不意にスネイプと目がかち合ったが、すぐに逸らされた。

思いっきり脱狼薬の話をするだろうに、父さんは俺がいていいのだろうか？

「セブルスも昨日は遅くにすまなかったね。それで、薬はいつ頃にできそうだい？」

「薬自体はすぐにできるが、来月でないと無理だ」

「ああ、そうだったね。一つ質問があるんだけど、今さっきの説明からするとだ。あれの中和剤を別に飲んでからウィルスを殺す薬を飲めば大丈夫だったんじゃないかい？」

「ベゾアール石などでも解毒する事が出来るが、ベゾアール石などを使うとウィルスを殺す事の出来る薬までも中和されてしまうのでな。トリカブトを中和し、かつある種の殺菌効果がある物でなければならなかったのだ。これまではリコリスが中和すると考えられていなかったゆえに、治す事は不可能とされていた」

なるほど、と父さんがため息をつく。

「また来月薬を届けよう」

「ありがとうセブルス」

にこやかな父さんに、「かまわん」とスネイプが小さく漏らした。その様子にダンブルドアがフォッフォッフォッフォと微笑み、

「ところでロイドは今年ホグワーツに入学じゃな」

と、明るい口調で言った。

「ええ、本当に大きくなるのは早いです。この子は昔からすぎる程に利口でしたから、手がかかりませんでしたけど」

父さんが俺の髪をなでた。

「それはそれは、ホグワーツに入ってからが楽しみじゃの。四ヶ月後ぐらいに入学許可書が届くじゃろうから、楽しみに待っておるが良いぞ。それでは、そろそろ帰るとするかのう。ロイドも遅い朝食を食べなくてはなるまいて」

そう言えば起きてから何も飲んでいなかったので、喉がからからだった。

「本日はありがとうございました」

「ふむ。行こう、セブルス」

「ロイド、今日はいつにも増して遅かったね。あまりにぐっすり寝ているものだから、起こさなかったよ。昨日も遅く寝たのかい？」

「え、いや。ダンブルドア先生とスネイプ先生が帰った後、すぐに寝たよ」

彼らが訪れたのが七時ぐらいだったから、早いぐらいだ。
朝食はトーストにハム、目玉焼きだった。
紅茶ではなく、コーヒーを飲む。うん、甘い。

「そうか。父さんね、もしかしたら就職できるかもしれないんだ」

「え、いつも働いてるじゃない」

それも、俺の事を気づかって、ご飯の時間などは仕事を入れないように、あえて深夜の仕事を入れていた事も少なくない。

「いつもはアルバイトだからね・・・・・・ちゃんとした仕事にだよ。病気が治るかもしれないんだ！」

「おめでとう父さん！今日は森でイノシシを狩ってきて、久々にごちそうにしよう！俺が行ってくるよ」

「良いね！賛成だ・・・・・・ロイド、ありがとう。でも、危ないから一人で行っちゃだめだよ」

父さんは昨日が満月であった事を感じさせない、今までで一番晴れやかな笑顔だった。

図書館で本を借りるのには杖が必要だ。
杖が貸し出しカード代わりになる。
なので、初めて図書館に行った時に父さんから杖をもらった。
生みの父とオリバンダーの店で買った杖だ。
六歳になった頃から、時たま買い置きが無く食べ物に困ると、森で調達するのに参加していた。
図体がでかい割に運動能力が高い動物なので捕まえるのが難しく、必要にかられない最近ではあまり食べなくなっていたが・・・・・・・

父さんは働きに出てる時間が多いし、そういった時間が親子のコミュニケーションの貴重な時間になっていたように思える。

俺と歓喜する義父の秘密・2

リーマスは不意に溜息をついた。
ロイドはそんなリーマスの様子に少し首を傾げたが、いつものように笑顔で誤魔化す。
そして、いつものように暖炉から図書館に飛んでった息子を見送った。

「ルーピン。」

「やぁ、セブルス。君に私の病気を治してもらえるなんて、昔の事を考えたら想像もつかなかったよ。」

玄関を勝手に開けて入ってきたスネイプに嫌な顔一つもせずに言った。

「脱狼薬も治療薬も我輩が開発した訳ではない。」

「そうなのかい？」

「我輩が貴様の為にわざわざそのような事をするとおもうかね？」

「たしかに、そうかもしれないね。でも、私の為に八年間も脱狼薬を作ってくれたじゃないか。」

あくまで感謝の姿勢をくずさないリーマスを鼻でフンとあしらった。

「ところで誰が開発したんだい？」

リーマスはスネイプに尋ねた。

「匿名だ。」

不自然な程短く切り捨てると、テーブルの上に二つの小瓶を置く。

「飲むのなら、とっとと飲め。
前にも説明したとおり、この薬はまだ発表されていない。よって、この薬を飲むのは貴様が最初という事だ。
理論は問題ないが、人狼という特異な性質上、モルモットで実験する事も出来ぬ。」

スネイプの眉間にしわが寄ったのを、リーマスは見逃さない。

「気が狂ってるとしか言いようが無い。」

スネイプがしみじみと言った。

「このような未だ実証されていない薬を、まだ年端もいかぬ子供が居る奴が飲むなんてな。一歩でも違えれば、死ぬかもしれぬのだぞ。」

初めてリーマスがスネイプから視線を外す。

「覚悟なんて出来ているさ。脱狼薬も一日飲み忘れれば、効果を発揮しないしね。ロイドに危険がおよぶ可能性の芽を摘み取る事の方が急務だ。ロイドに噛み付いてしまったらと思うと・・・・・・こ

の八年間そう思わない日は無かった。それに、ロイドが折角見つけてくれたんだ・・・・・・」

「知っていたのか？」

今度はスネイプがリーマスを見る番だった。

「君はダンブルドアよりも後に来たからね。最も、ダンブルドアがそう仕組んだのかもしれないが。

あの子にそんなに早くに気付かれていようとは、思いもしなかったよ。そして、気付いている事を私に悟らせようともしなかった。

私は人狼だとばれた事を嘆くより、人狼である私を、ロイドが受け入れてくれていた事に動揺したよ。

純粋に魔法界で育った子供は皆、狼人間というものを忌々しく思っているからね。無理も無いけど。」

魔法界の者なら口にこそ出さないが、ヴォルデモートの名を知っている。

それと同じぐらい、あの暗黒の時代において魔法界で子供を持つ親は皆、フェンリール・グレイバックという残忍な狼人間を恐れていた。

こいつはヴォルデモートに逆らった親の子供を狙って噛み付く。

人狼と化した子供を魔法使いを憎むように育て上げ、仲間を増やすことを使命だと考えていた。

これらが、現在人狼が嫌煙される冠たる理由だった。

最も、このような理由が無ければ人狼に関する研究は進まなかっただろう。

「私で実証されれば、多くの人が助かる事になる。ロイドの？？私はこれまでロイドが何故必死に勉強するのか知らなかったよ？？努

力も報われる事になる。」

リーマスの顔には笑みが浮かんだり、消えたりしていた。

「しかし、四六時中勉強していたといっていたな？不自然には思わなかったのかね？」

「知識を得るのが好きだとだけ言われたよ。出来る限り好きなようにさせてやろうと思って、深く追究しなかったけどね。しかし、実際気を使われていたのは私かもしれないね。この一週間は図書館に入り浸らないで、本だけ借りて、一時間もしないうちに帰ってくるよ。さて、ロイドが帰ってくる前に飲むとしようか。」

薬瓶に手を伸ばした、リーマスにスネイプが尋ねた。

「遺された者はどうなるんだ？」

スネイプの問いかけにリーマスは答えなかった。

視線がテーブルに固定される。

脱狼薬は、例え理性を保つ事を可能にさせようとも、満月までのカウントダウンと何ら変わりなく、またあの異形に成り果ててしまうのかと思うと、見ているだけで憂鬱になる物だった。

しかし、今は違う。

たった一杯。この脱狼薬を飲み終えれば、二度と人狼になる事は無い。

この一週間、苦みなんて気にならなかった。

いつもとは違う、脱狼薬の横に置かれた焦げ茶色の薬を見つめて、ぐいっと飲み干す。

続けて、焦げ茶色の薬を飲む。

身体の中で、熱く、何かが弾けたような気がした。

俺と大きな司書長の対話

お昼の時間帯で館内も疎らになった頃、
煙突飛行で図書館に着いたロイドは、返却手続きをする前に奥の戸棚へと足を向けた。

広すぎるこの図書館では当然、需要のすくない専門書や闇の魔術に関する本は奥の方に保管されている。
手前には主婦や低年齢層に人気な小説や絵本、家庭雑貨などの雑誌が置かれている。
それだけでも、蔵書の数は半端ない物だから、屋内だというのに、ロイドは毎回、薬学のコーナーに行くのに五分程かけていた。
今日はそこからさらに奥にある戸棚に用がある。
次に勉強するなら、当然「闇の魔術に対する防衛術」だ。
なぜ防衛術が??薬学より需要が高いように思える防衛術が??薬学より奥の戸棚にあるのか？
それは、その本質を問うには闇の魔術と切っても切り離せない縁を持つという事を示唆していた。
閲覧禁止に指定されていないとはいえ、この図書館は公立だ。
お役所が闇の魔術に関する本を一般人が盛んに見て、喜ぶ訳が無い。

「まさかホークラックスの資料がこんなに簡単に見つかるなんてな。」

不意に出てしまった言葉に、周りに人のいない事を資料を探す前に念入りに確認しておいてよかったとロイドは思った。
何故トム・リドルがわざわざスラグホーンにホークラックスの質問をしたのか。
ロイドはそれが知りたかった。

あいつがあの時質問していなければ、もしかしたらハリー達に分霊箱の秘密を握られ無かったかもしれない。

所変わって事務室。
ホークラックスに関する資料は貸りなかった。
貸し出し記録という、証拠に残るからだ。

「すみません、マックスさんいらっしゃいますか？」

「おお、ここだ。」

よう、とマックスが手を挙げる。

「どうした、最近は来てもすぐに帰ってるけど。」

「今まで調べてた奴が終わったんで、一休みって感じです。」

「そうか、お前の調べ物長かったからなぁ。お疲れ様。」

マックスが言った。そして、事務机の引き出しを開けて、何やら探り始める。
マックスの体格には（身長は二メートル近くあるのではないだろうか？）その机はあまりにも小さく見えた。

「じゃあ、ここに来たのは質問じゃないって事だね。最近は質問を受ける事も減っていたけど。どうしたんだい？」

「ええ、後数ヶ月でホグワーツに入学なので、薬学以外を勉強しようと思いまして。」

「なるほどね。薬学の知識だけに偏ってしまっているから、総合的に見れば正解だけど、寂しいね。薬学について討論してくれる人はあまりいないのに。」

「すみません。」

ロイドは申し訳なさそうに言った。

「いや、ロイド君がホグワーツに行ったらさらに寂しくなるだけだから、今のうちに慣れておかないと。ところで、どこの寮か良いんだい？」

「あー、考え中です。たぶんレイブンクローなんかがあってると思うんですけどね。マックスさんはどこの寮だったんですか？」

マックスは随分前からロイドに「マックスでいい」と繰り返していたのだが、この少年から敬称を取り除かせる事は出来なかった。

「たしかに、レイブンクロー向きだね君は。新しいもの大好きみたいだし。僕はスリザリンだよ。見た目通り。」

「甚だ意外ですね。」

ロイドはこんな優しい人のどこに目的を達成する為に手段を選ばない狡猾さがあるのだろうと、未だ引き出しを探るマックスを凝視した。

そんなロイドの視線に気付いたのか、

「昔はね、マッドだったんだよ。」

「へ？」

「君みたいに幼い頃から薬学にどっぷり漬かっていてね。見境なく実験したものだよ・・・・・・・ それに、家が純血主義で金だけは有り余っていた・・・・・・・ お、やっと見つけた。」

マックスは手の平サイズの包みをロイドに差し出した。

「いや、前からあげようと思ってたんだけどね。開けてみて。」

細い紐を引っ張ると、小包がパッカリと開いた。

「これって！」

「ベゾアール石だよ。」

事も無げに言うマックス。

「こんな高価な物受け取れません！」

ベゾアール石は大抵の解毒剤の主成分となるので非常に需要が高い。しかし、ヤギの腸から一つしか取り出す事が出来ないので、あまり市場に供給されず直接癒療機関にまわされる。
研究者であっても、個人が手にするのは容易い事ではない。

「いいんだよ。入学祝いとでも思ってくれ。君は毒薬とかそんな事ばかり調べていたから、いずれ役に立つんじゃないかと思ったんだ。」

「え、でも・・・・・・ いえ、ありがとうございます。」

「受け取ってくれたなら良いんだ。・・・・・・ おや？これはダンブルドア先生。お久しぶりです。」

「久しぶりじゃのう、マックス。」

なんでこうも、ダンブルドアとの接触率が多いのだろうか。
全然うれしくない、と思っているロイドに、

「緊急事態じゃ。すぐにロイドの家に向かわなくてはならぬ。丁度いい、マックスも一緒に来てはくれんかね？」

「緊急事態ですか？」

素っ頓狂にロイドが聞く。

「緊急事態？何故ロイドの家で？それに私が行く意味は・・・・・？」

「それも含めて、ロイド、落ち着いて聞くのじゃ。」

ダンブルドアは一拍置いてから言った。

「リーマスが倒れた。」

「へ？」

俺と非力な自分のファーストコンタクト・1

「どういう事ですか？ダンブルドア先生？」

ロイドは明らかに冷静さを失い、ダンブルドアに詰り寄っていた。

「落ち着くのじゃ、ロイド。ここではまずいのでは無いのかね？まず家に行くとしよう。マックスは儂が付き添い姿くらましで連れて行くから、先に行ってセブルスから説明してもらうのじゃ」

ロイドは口を開こうとしたが、何も言わずに事務室から出て行った。

「薬学がらみですか？」

ロイドの小さな後ろ姿を見送りながら尋ねるマックスの空気がいつもと違う。

「何故そう思ったのかね？」

「ロイドの研究が最近終わった事は今さっき聞きました。ここ一週間はあまり図書館にいませんでしたし。彼が重点的に調べていたのは主に二つ。脱狼薬とトリカブト、別名ウルフスベーン。狼殺しです。完成させようとしていたんでしょう？」

「昔から君の薬学に関する知識は見事な物じゃった。この数十年間に薬学の分野は非常に発展したが、相変わらずのようじゃの。君のような人物に、教師の仕事を断られたのはホグワーツにとって非常に大きな損失じゃろう・・・・・・」

既にダンブルドアは歩き始めていた。
マックスは出欠確認のプレートに杖をふって勝手に『非番』と改める。
ダンブルドアは何の抵抗も持たずにただ着いて来るマックスに少々疑問を持ったようだ。
果たして、こんな男だったか？
記憶している限り、薬学だけに忠実でそれのもたらす結果など気にしなかった奴だと思ったのだが。

「お世辞なんか言っても何も出ませんよ。それに、純血主義どっぷりだった私が教鞭をとっていたら、あの暗黒の時代に拍車を掛ける役割しか出来なかったでしょう」

マックスはそう言って、胸糞悪くなった。
その様子に、

「今はもう違うじゃろう？」

ダンブルドアの明るい瞳が光る。

「もちろんです。さて、早く行きましょう。」

ダンブルドアがマックスの腕を掴むと、二人は一瞬のうちにしていなくなった。

「ウィンストンの森小屋！」

事務室から駆け出したロイドはすぐに帰宅した。

「スネイプ先生！」

「静かにせんか！」

思わず叫んだロイドをスネイプが一括する。

「すみません。父の容態は？」

「何とも言えんな。様子を見るしか無いだろう」

スネイプはそれきり押し黙った。

玉のような汗をかきながら、うわ言を繰り返す義父を直視できない。

汗を拭かなければと思い至り、台所に降りて行った。

俺と非力な自分のファーストコンタクト・1（後書き）

遅くなってすみません。

俺と非力な自分のファーストコンタクト・2

ダンブルドアに連れられてやってきたロイドの家は名前の通り簡素な森小屋だった。
ベランダ付きの木造二階建てで、広いとは言えない庭にさらに小さな畑があるぐらいだ。

「ロイド、どうじゃ？」

ノックもせずに玄関を開けたダンブルドア。
視線を移すとマグル式でタライに水を入れていた。
このくらいならタライを呼び寄せて魔法で水を作れば良いものを。

「どうしよう。俺の所為だ・・・・・・スネイプ先生は様子を見るしか無いと」

その中に数枚のタオルを放り込んで二階に上って行った。
ロイドの声はほとんど独り言だった。
そういえばロイドの居ぬ間に尋ねておかなければならない事がある。

「ロイドの作った脱狼薬はどのようなものだったんですか？」

「リコリスを使ったものじゃよ。これだけ言えばわかるかの？」

「大体予想はついていましたからね。やはり臨床実験できないのが仇になりましたか・・・・・・」

「リーマスもその点についてはセブルスから説明を受けているから

承知して飲んだからの」

「理論は勿論間違っていなかったということですね」

念を押して問うと、ダンブルドアは小さく頷く。

「聖マンゴに連れて行きたいのじゃ。儂とセブルスだけでは少々人数不足での。手伝ってもらえるかの？」

「もちろんです」

ミシミシとする階段を上って半開きになっている部屋に入り、青白い顔で横たわるロイドの父を認めた。

うわ言をつぶやいてはいるものの、呼吸は正常そうだ。

もしかしたら、と或る可能性に思い当たるが自分は癒者ではないので断言できない。

「マックス、どうじゃ？」

「やはり、何とも言えませんね。理論以上の事は何にも。私は専門家ではないので。このままにしていても埒が明きませんから早いところ聖マンゴに連れて行きましょう」

『聖マンゴに連れて行きましょう』とマックスが断言したとき、ふと暗い記憶がよみがえってきた。
白いシーツの上に横たわる本当の両親、リリーとジェームズ・ポッターの姿だ。
ヴォルデモートに殺された次の日、彼らの遺体は破壊されたゴドリックの谷の家から聖マンゴに移送された。
アバダ・ケダブラの呪文によって殺された彼らは非常に美しい状態だった。眠っているのと大差なかった。
既に冷たく固まってしまった母の指に触れて初めて彼らが死んでしまっているのだと気付いた程に。
しかし、布に覆われた顔が露にされると恐怖と叫びの表情が張り付いていて思わずぞっとしてしまった。
目を背けて顔を上げると、静かに泣いているリーマスの顔があった。
口元に力が入らなくなって、目頭が熱くなり、それから背筋をそっと寒いものがなでた。
ぼんやりとする頭で父の方を見ると、力の入っていない腕がだらりと垂れ下がっているのを見た。
重たく凍ってしまったその腕を暖かそうな毛布の内側に入れてやると、もう立っていられなかった。

「・・・・・・ロイド？」

マックスの呼ぶ声にハッとする。

今まで心の底に押し込んできたものが溢れてきて足下がぐらぐらと揺れた。
なんで今まで忘れていたんだろう。
その当時通常の三歳児なら忘れていてもおかしくはない事だが、俺は覚えていないとおかしい。
水底から這い上がってきたような虚脱感に襲われていると、さっきまでベッドの上に居たはずの父さんが居ない事に気付いた。

「あれ、父さんは？」

「やはり、気付いていなかったんだね。もう僕とダンブルドアとスネイプ先生で聖マンゴに連れて行ってしまったよ」

「すみません、何も手伝わなくて・・・・・」

「大丈夫だ。でも、君のお父さんが危ない状態のときに君まで危うくなってしまったら君のお父さんは誰に頼れば良いんだい？」

そうだ。とりあえず当面どうするかだ。
俺に出来る事はないのか？

「マックスさん、すみませんが連れて行ってください」

「最初からそのつもりだよ。さあ、腕を掴んで」

バシンと言う音が空室に響いた。

俺と非力な自分のファーストコンタクト・２（後書き）

バリバリの文系である程度は調べるようにしておりますが、まったくそっち方面に明るくは無いので医療（癒療？）関係はやっぱりツメの甘さが出てしまいます。
ざっくりと読んでいただけるとありがたいです。

俺と非力な自分のファーストコンタクト・３

しばらくの入院。２４時間体制の様子見。
それしか出来る事は無いらしい。

聖マンゴに着くと既にスネイプ先生が説明してくれていた。
それから調合法を考えた自分がいくつか質問されて、それでもやはり癒者は入院してしばらく様子を見るしか無いと言った。
下手に治療するとかえって悪化するかもしれないとも言っていた。

病院独特の魔法薬の臭いがする廊下を歩きながら、春めいてきたにも関わらず相変わらず寒い空気から逃れさせるようにポケットに手を滑り込ませるとゴツゴツした何かに触った。
ハッとしてそれをつかみ出す。マックスにもらったベゾアール石だ。
これを使えば父さんは一命を取り留められるだろう。リコリスの毒もトリカブトの毒もベゾアール石で中和できる。
しかし、そうなれば治療は中途半端に終わってしまう。次の満月の夜どうなるかもわかりはしない。

息を切らしながら階段を上る。呼吸をするたびに寒さが身体にしみ込む。ここは本当に病院か？冷えた頭が引っかかった言葉を拾い上げた。
満月？そうだ今日が満月だ。
既存の脱狼薬を飲み終わってから飲まなければいけないからだ。
じゃあ、今晩父さんはどうなるんだ？

そうこう考えている内に病室のある４階に着いた。
４階は薬剤や毒による障害を持つ患者の為のフロアで、軽重はあるが笑い過ぎであったり吐き過ぎだったりの影響で焦点の定まらない者がほとんどだ。
もちろんその中には魔法薬の調合の失敗による患者も含まれる。
だが、今回調合したのはあのスネイプ先生だ。それに、脱狼薬程複雑な調合ではない。
悪いとしたら全て自分なのだ。
患者を視界に入れないようにして、行けば行く程静かになって行く廊下を逃げるようにして突き進む。
目当ての部屋の前に着くと、ちょうどマックスが出てきたところだった。

「マックス」

「意外と遅かったね、ロイド。説明はもう済んだのかい？」

「うん。でも、もう少し検討してみるから今日は残っていてほしいって。
今更なんだけどさ、こう言う事って魔法省なんかを通さずにやって良い事だったの？」

「こう言う事って？」

「薬学って人の命に関わるかもしれないのに、検査も無しで薬を飲ますなんて・・・・・・
相応のところに届けなくても良かったのかって思って」

「ああ、その事なら心配ない。もちろんそういった手続きは必要な場合もある。正式に認められたいならば治療法と実験結果を申請し

なければならないし、聖マンゴで使える薬はそこで認められた物だけだ。
だけど新しい薬はやはり使ってみなければわからないから、事前に申請することはほとんどないね。だから、手続きが必要な場合に関してもきちんと機能してないんだ。
危ないと思ったなら魔法省に依頼すれば権威のある人に確認してもらえるよ。手数料取られるけどね。
魔法省を通してないにしろ、今回の場合はスネイプ教授がきちんと確認して下さっている。まぁ、あっても無くても同じさ」

右手に持っていたベゾアール石を気付かれないようにしまった。
彼曰く、臨床実験もほとんどやらないらしい。
マグル界から見てみればあり得ない話だ。
・・・・・・ここで物申したって、責任転嫁も甚だしい。

「君一人が重く責任を感じる事は無いよ。人狼に取っては悲願の時なんだ。君の父さんは全て理解した上であれを飲んだ。後はリーマス次第だ」

「ありがとうマックス」

「僕はちょっと癒者に話したい事があるから抜けるよ。また戻って来る。しっかり着いていてあげなさい」

扉を開けると、父さん以外は居なかった。
ダンブルドアとスネイプは帰ったのか？
父さんの顔色は今さっきよりは良かった。うわ言もつぶやいてはいない。いつもの満月の前と変わらないようにも見える。身体の内で今も闘っている。
小さな窓が一つある個室に本をめくる音がかすかに聞こえた。

ベッドの対面に威厳のある女性の肖像画が一枚飾られていた。時折こちらを見るが、後は黙って本を読んでいる。

額の下に小さく『非常の場合はお申し付け下さい』と書かれていた。どうやら彼女がナースコール代わりのようだ。

窓辺の椅子に腰をかけて外を見た。パジャマを着た子供が、昼下がりの暖かい日差しの中で両親に手を引かれて歩いているのを義父に背を向けてみていた。

俺と非力な自分のファーストコンタクト・３（後書き）

今回の話を書いているときに
『俺と歓喜する義父の秘密』に矛盾点があった事に気付き修正しました。
会話文を少し修正しただけなので、以下に簡単な説明を書いておきます。

訂正前；満月の次の日ダンブルドアとスネイプが来て、脱狼薬を置いて行く。一週間後リーマスはロイドの開発した薬を飲む。三月頃のお話。

訂正後：満月の次の日ダンブルドアとスネイプが来るが脱狼薬は置いて行かない。
次の満月の前に届けることになる。二人が来たのは三月。脱狼薬が届き、リーマスが倒れたのは四月。

失礼致しました。

俺と非力な自分のファーストコンタクト・４（前書き）

１２．２１　矛盾点修正

俺と非力な自分のファーストコンタクト・４

親子連れの姿が小さくなって、再び父さんの方に向き直った。コートの中のベゾアール石に触れる。自分の体温ですっかり温まっていた。

考えろ。何がダメだったんだ？見落としている事は無いのか？

人狼の生態、脱狼薬、リコリス。学んだ事を頭の中に描いて反芻させるが何も出て来はしない。スネイプも見つけられなかったのに、自分も見つけられるのか？

何分経っただろうか？瞬きを忘れられた瞳が痛みを訴えた頃、しんと静まり返っていた部屋にノック音がひびいた。

「どうぞ」

「ロイド、リーマスの具合はどうかの？」

ダンブルドアだった。スネイプも居る。

「今さっきよりは落ち着きましたが・・・・・・やはり、原因はわからないのでしょうか？」

「わからない事ばかりじゃ。じゃが、今日が満月である事には変わりあるまい。

リーマスを人狼の為の隔離病棟に移さねばならぬ。良いかの？」

『人狼の為の』と聞いて思わず眉をひそめた。『人狼の為の』じゃなくて『人狼以外の為の』だろう。いや、勿論父さんだって人を噛みたくはないだろうから黙っておく。

「ええ、もちろん」

そう言いながら、どのような扱いを受けるのだろうと案じた。

「後一時間後には癒者も来るじゃろう。今日は病院に泊まって行くと良い。手続きはしておくのでの」

「何から何までありがとうございます。一日中・・・・・・」

あれ？

「学校の方は大丈夫だったんですか？」

「心配無用じゃ。明日からイースター休暇中なのでのう」

そう言えば今年のイースターは明日からか。そもそも土曜日なら授業はないはずだ。

「マックスはどこに行ったのかの？」

「癒者に用があると言っていましたよ」

「そうかの。マックスには付き添いを頼んでおいた。いくら君が早熟だからといって、一人にする訳にもいかんし、わしらも残れんのでの」

「明日もまた来よう。それまでにいろいろあたってみるので早とちりはせぬように」

スネイプが言った。

「お二人とも、本当にありがとうございます」
二人に頭を下げた。ダンブルドアは少し微笑んでゆっくりとした足取りで帰っていった。

一人残された部屋でまた父の青白い顔を見る。
後一時間。どうするべきか。
とうとうポケットから石を取り出した。半開きの口に押し込んでしまえ。そうすれば少なくともお前は人を殺さずに済む。
『早とちりするな』とスネイプは言ったが、命の方がよっぽど重要だ。例え自分の行為が父の勇気を踏みにじる事になっても。何故父さんはどこの誰が作ったのかわからない薬を飲んだんだろう。危険な事だと最初に説明されただろうに。
震える手は自ずとそれを唇に近づけていった。

「そんなことしてはいけません」
心臓が飛び出すかと思った。それくらい驚いた。ひゅっと息を飲む。
「勝手にそのようなことをしてはいけません。こっちです。そうそう、絵の方」
ナースコール代わりだと思っていた彼女が本をたたんでこちらを向いていた。

「リーマス・ルーピンが運ばれてきた時に大体の事は聞きました。人狼治療薬を開発したのはすばらしい事ですが、それは理論の上の事。何度もの失敗や時には幸運が重なって薬学は進歩してきました。あなたも薬学を学ぶ身であるならば、まずこれを肝に銘じて置かなければなりません」

絵の中の彼女が近づいてきて（勿論絵の中だけでの話だが）手元を覗き込んだ。

「ベゾアール石ですか。確かに二つの毒を中和することができますね。しかし、今は何もしないという事が正解でしょう。この場合においては、何かをして失敗するより何もせずに失敗する方が好ましい」

何もせずに？

「それはどういうことですか？」

「そのままの意味です。あなたの精神を考えると、今回は何もせずにしておいた方が良い。独断でベゾアール石を使ったとなると全てあなたに降り掛かりますからね・・・・・・」

わかるでしょう？、という言葉を彼女は飲み込んだ。

多くの人間がを人差し指で俺を指して『人殺し』と囁く幻想を見た。

「新薬による入院は大抵この部屋が使われます。私も多くを見てきました。この病院の誰よりもそういったことに詳しい自身がありますよ！

死に至る事例の多くは、理論のミスです。理論が合っている場合

の死はほとんどありませんでしたから、そう落ち込む事はないのです。もっとも、副作用などはどの事例でも多くみられますが。
副作用が出ても、また治せば良い事です。必要なのは患者を絶対に完治させるという心意気ですよ！あなたがお父さんの力になってあげなくて、一体誰がお父さんを救ってくれるというのです？」

返事をせずにローブから脱狼薬の研究ノートを引っ張りだした。パラパラとめくってみる。絶対に完治させる・・・・・・
そして、副作用という言葉が頭の中に響いた。目の前の死だけでも恐ろしいのに新たな怪物が心の中に住み着いたようだ。
だから彼女が「ごめんなさいね、きちんと話を聞いてくれる人は少なくてつい・・・・・・」と言うのを聞き流した。

「副作用は、半身不随になったりだとか、口がきけなくなったりだとかですか？」

「もちろん事によって違いますが、多くは大したものではありませんよ。
そう悪い方向に考えるものではありません！『元気爆発薬』だって耳から煙が出るという副作用が理由で最初は誰も使いませんでしたが、今では広く受け入れられているではありませんか！
それに人狼治療薬は多くの癒者に認められていますよ！お昼から薬科はこの話題でもちきりです！なぜお父さんが倒れたのか皆さん不思議がっていました」

「多くの癒者が正しいと、認めてくださったのですか？」

わざと『正しい』の部分を強調して聞く。

「ええ。それに11歳の男の子が開発したって言うのが拍車をかけ

ていますから、薬科だけでなくて多くの癒者が目を通す理由になりました。薬科だけでなく、確かに認められていますよ・・・・・・最新の研究から、相当古い研究までよく目を通しているなって皆さん褒めてらっしゃいます」

「でも、父さんがどうなるかはわからないでしょう？」

「いいえ、その点に関しては先ほど話がまとまりました。そろそろ来るはずですよ」

俺と非力な自分のファーストコンタクト・5

病室のドアがキィと開いた。

「原因が分かったよ」

そう言ってマックスは俺の書いた脱狼薬の理論を開く。受け取って目を通してゆく。新しい書き込みが増えていた。

魔法薬が難解だとされる理由は様々だ。混ぜる回数や方向にそれぞれ意味があって、その意味だって様々な考察から生み出されるものだから解釈が研究者によって分かれている。

そこに、使われる薬草の解釈がてんでばらばらな状態だからさらにこんがらがってみんな教科書を投げ捨ててしまう。同じく複雑だとされる変身術の方がまだ整合性のある学問だ。

「ハッグの唾液・・・・・・人に悪夢を見せる強力な睡眠薬」

「その通りだ」

脱狼薬とリコリス解毒剤を飲んだ事で起こる反応は一つではなかったということだ。

ハッグの唾液はその名の通り、薬を服用した人物の唾液も睡眠薬になるというやっかいな薬で、解毒しない限り悪夢を見続ける。ハッグの唾液で眠っている人物から薬を取るのが一般的な入手方法で、煎じて作るという事はまずない。脱狼薬とリコリス解毒剤がハッグの唾液が分泌される過程を再現してしまったらしい。

確か魔女狩りが横行した時代にマグルに嫌がらせとして飲ませる魔法使いが増えた時はそれなりに知られた魔法薬だったが、今となってはすっかり廃れてしまったはずだ。

『病気のようなもの』と考えられていて、『こうやって体内で反応が起こっているのではないか？』という仮説はあったがそれも古い話だ。

何故気付けなかったのか？化学で言う複雑な『異性体』のようなものと言えば良いのだろうか？一つ一つあげて行くときりがない。複雑に枝分かれした仮説。俺が指摘したのがＡだとするならばマックスが気付いたのはＺだ。

杖を振って花瓶をドブネズミに変える。もう一振りして羊皮紙をシャーレとスポイトに変えて唾液を採取する。

「インペリオ　服従せよ」

禁じられた呪文は中々魔力を使うので、有声で行った。そのままドブネズミに唾液を飲ませたら、ひっくり返って眠ってしまった。また一振りして花瓶に戻した。

「こら、勝手にそんな事してはいけません」

絵の中の彼女が言う。

「すみません」

「まぁ、そう言う事だ。リーマスには悪いが一晩悪夢を見続けてもらうしか無いだろう」

扉が開いて二人の看護士と癒者が入ってきた。

「リーマス・ルーピンさんのご家族の方ですね？隔離病棟へ連れて行きますがよろしいですか？」

「お願いします」

看護士はそのまま父さんの乗ったベッドを運んで行ったが、癒者は窓辺の椅子にどっかりと座り込んでこちらをじろじろ見ている。明るいブルーの瞳がぼさぼさのブラウンの髪の毛ごしに覗いていた。目の下にはクッキリと隈ができている、よれよれの中年だ。父さんより少し年齢は上ぐらいだろうか？

「主治医のブラム・マグリだ。よろしく。といっても、今晩と明日の朝だけの短い付き合いになると思うが」

「よろしくお願いします」

どことなく威圧的な雰囲気に気圧されながら返事を返す。

「まぁ、マックスに教えてもらっただろうから省くぞ。明日の朝、満月が西の空に消えたらすぐにハッグの解毒剤を飲ませる。で、今日の晩に変身しなかったら薬は正しいと一応は証明されるんだが・・・・・・念のため来月の満月の日にもっかい来てくれ。一ヶ月の体調の変化と、本当に変身しないかどうか改めて検証する必要があるからな」

「は、はい」

「そんなに一気に話さないでやってくれ。この子はだいぶ混乱してるから・・・・・・」

「もう大丈夫ですよ」

「本人がそう言ってるんだから大丈夫だろう。来月も俺が担当にな

るように手回ししてみるが、必ずしもそうなるとは限らないから。
なんで俺が来たのかと言うとだな、これを渡したかったんだ」
渡されたのは分厚い羊皮紙の束だった。いくつもの項目がある。
「一日一枚だ。それに患者の症状の変化を書いて三ヶ月分ためれば魔法薬学会に提出できるぐらいにはなるだろう。一番下の空欄には気付いた事を目一杯書くんだぞー。
それから、毎日とーちゃんの症状を確認する事。少しでもおかしければすぐに病院に来る事だ。
三ヶ月分溜まった後はその辺りはマックスが詳しいから聞く事だな。今のところ言えるのはこれぐらいか？」
「三ヶ月分も必要か？」
マックスが怪訝そうに問う。
「魔法薬という観点から見れば二週間で良いが、満月が絡んで来るからちょっと長めにな。癒者からすれば半年分ぐらいのデータは欲しいんだ。
大体、薬学者の作るデータは杜撰だし、副作用もあり得ないのばっかりだろうが。だから今のうちに若い世代をきょーいくするんだよ！」
何やら薬学者に恨みがあるようだが放っておこう。言葉に熱が入りすぎている。
「わかりました。出来るだけ丁寧に書きますね」
「わかれば良いんだ、わかれば。

寝袋持ってきたからこの部屋で寝ると良い。ちょっと寒いが。朝になったら、とーちゃんが帰ってきてるだろうからな。それじゃあ」

マックスと二人残された部屋で、寝袋を広げる。中はあったかいかなと内側の生地を見てみると、なんだこれは。

なんで寝袋の中にベッドが入ってるんだ。そんなところに拡大呪文使わなくてもいいじゃないか。その発想は無かったな。

「ロイド、どうして脱狼薬の事を一言も教えてくれなかったんだい？」

マックスが言った。

「父は人狼であるという事を知られたくなかったと思ったからです。特に俺には知られたくなかったでしょうからね。それに俺が発表すると身近に人狼が居ると勘ぐられるでしょう？

まぁ、あのときは気持ちが急いていたし、どうやって発表すればいいのか知らなかったから一番確実な方法を取ったんです。

薬を運んでくれるフクロウを使ったのは失敗だったかなぁ」

乾いた笑い声が部屋に響く。

「たしかにそれはまずかったね」

マックスも俺に合わせて笑った。

「こんな事になると思いませんでした。誰かがしかるべき過程を踏

んだ後に、父さんの元に届くと思ったんですよ」

「ツメが甘かったんだね」

「全くです」

窓から入る光がオレンジ色を帯びてきた。昼間は寒いと思っていたが、その後気温が上がったのだろうか、丁度良い温度になっていた。光に照らされて小さなほこりが宙に漂うのをしばらく見ていた。

「どうして、あの時服従の呪文をつかったんだい？」

あの時？ネズミにか？

「一番確実な方法でしたからね。人に使わなければ罪には問われないでしょう？」

俺はしれっと言った。

「禁じられた呪文である事は知っているだろう？」

マックスの声はわずかながら怒気を含んでいるように聞こえる。俺は首を縦に振った。

「他に禁じられた呪文を使った事はあるのかい？」

「いいえ。今まで習った呪文は全て使えるようにしたかったんですが、磔の呪文は虫酸が走るから最初から使う気はないですし、死の呪文は使えませんでした」

何故、とマックスが言おうとするのを遮って続ける。

「服従の呪文は今さっきのようにネズミを出して練習しました。
何故死の呪文を使おうと思ったのかと言いますと、イノシシ狩りのときに失神呪文で捕まえたやつと死の呪文で捕まえたやつを食べ比べたかったからです」

努めて明るく言った。というか、事実なのだ。たぶん失神呪文の方が捌くまで生きているから美味しいだろうが、死の呪文のほうが捌くときにイノシシが暴れなくていいかなって思ったんだ。ホント、出来心だったんだ。
そんな俺を見て、マックスは噴出した。

「そんな理由で死の呪文を使おうとしたのかい？そりゃ使えないよ！でも、今の話を聞いて確信した。ロイドは案外スリザリンでもやっていけるかもしれない」

マックスは笑うまいと努力しているように見えたが、ニンマリと口元が笑っていた。

「父がグリフィンドールだから、スリザリンは避けたいんですけどねぇ」

そのままマックスは寝袋の中に入っていく。なるほど、靴は脱ぐのか。俺も自分の寝袋に入っていった。ベッドからチャックまでの高さは１１歳児の胸辺りほどだ。案外高い。
顔を上げると既にマックスは寝袋の中に入ってしまっていたので、俺もそのまま横たわった。

「前から不思議に思ってたんだ。どうして君がそんなに知識を欲す

るのか。
脱狼薬のためと考えたら説明がつくけど、それだけじゃないよね？」

「ええ」

自分が暴かれるような嫌な感じを覚えながら答える。

「君は昔から大人びていた。言葉遣いも、考え方も普通の子供とは違ってね。
僕には子供が居ないから、児童書コーナーを行き交う子供達と比較するしかない。だけどやっぱり、君の方が・・・・・・なんて言うか個性的だよね、すごく」

「自分自身、同年代と友人が居ないのでこれが普通だと思っていました」

「大人に囲まれて成長したなら、確かに仕方ないかもしれないね。だけど時々思うんだ。君はもう少し人と関わるべきだよ。
大人になる前からそんなに壁を作るような話し方をしていたら本当にダメだ」

「少し早いけど、やる事も無いしもう寝ようか」とマックスが言った。俺も寝袋のジッパーを閉めた。

こちらに生まれ変わって、身体に精神が引っ張られた『普通』を過ごしてきた。前の自分の、ある程度成長した精神をマックスが個性的と表してくれたならそれで良いかなと思った。
人と関わるべき、か。

俺は六年ぶりに就寝前の読書を欠いた。

俺と非力な自分のファーストコンタクト・５（後書き）

実は少し常識が飛んでる子です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0638v/

ハリー・ポッターと非力な兄君の人生

2011年12月27日23時48分発行